

アマダイ通信NO. 93

(Tile fish network letter)

2013年 元旦

知人・友人各位

年末の総選挙で、自公で衆議員 480 議席の三分の二を超す議席を獲得、参議院で否決した法案も衆議院で再議決、成立させる強力な権限を手に入れた。タカ派の安倍自民党とハト派を標榜する公明党では安保・防衛政策では溝が深い、極右の石原真太郎率いる維新が補完、中韓との軋轢が高まらないか？弱者にも厳しい。早速、無駄な公共事業の大盤振る舞いにも走り、国の借金も増え、財政は悪化、原発の不安は抱えたままとなる。

次のステージは夏の参議院選挙。ここでも自・公・維に過半数の議席を与えるか、更には 2/3 の議席を与えるかが焦点になる。両議院の 2/3 の議決で憲法改正は発議される（憲法 96 条）。今回選ばれた議員の 4 年間の任期中に、参議院の選挙は二回ある。憲法改正、つまり戦後日本の総括が、個々人にとっても自分のこれまでが問われる。昨夏以降の中韓、取り分け中国の強硬姿勢は自・公・維の圧勝に力を貸した。憲法改正に向け、石原・安倍は更なる挑発を続け、国民を煽るのではないか？日中両国民の冷静な対応が望まれます。

経済も上向き、皆様にとって新年が、平和で裕かな一年となることを祈念致します。

◎ニューヨークのハリケーン・サンディの教訓

昨秋、ニューヨークをハリケーン・デイーンが襲い、空前の被害をもたらした。四メートルの高波でマンハッタンなどを走る地下鉄が水没、地下を走る高速道路も勿論水没、電気も止まり、ビルや家屋にも浸水。地下に電気・通信設備や機械室があるビルは、照明や空調が使えず、通信も途絶。被害はまだ回復していないという。

東京も山の手は別として、下町は要注意だ。東京の地下鉄もこれまで台風では大した被害が出ていないが、津波には備えないと大きな被害を受けそうだ。都心部の高速道路を地下化しようという動きがあるが、考えもの。むしろ今でも低地部の地下を走る道路や地下街の、津波による浸水被害をどう防ぐか？少なくするか？工夫が必要だ。ビルの電気・通信設備・空調設備なども普通地下に置くが、津波の及ばない上層階に置くなどの対策が必要だ。万一に備えた自家発電設備も、地下にあったのでは津波の時は役に立たない。電線・電話線などを収容する地下の共同溝も浸水対策をする必要があります。

東京湾の津波はそんなに高くならないと思うが、名古屋や大阪は要注意。地下鉄は勿論、在来線、新幹線、高速道路も海辺の低地を走り、空港も海の上。全滅の恐れ。東名高速は山側を走る第二東名高速である程度カバーできるが、鉄道は新幹線も在来線も富士川から名古屋までは海沿いの低地を走る。東北大震災の時に、内陸部を迂回する JR 貨物の物流網が大きな力を発揮したように、いざという時は山側を走るリニア新幹線や長野・北陸新幹線が大きな力を発揮する。ただ、待望のリニア新幹線が出来ても、名古屋と品川の駅が冠水したらリニアも水没する可能性がある。名古屋と品川の駅は、津波の及ばない高さにまで一旦上った上で、地下のホームに降りる構造になるのでしょうか？グラッと大きな揺れが来たら、巨大な遮蔽壁が周りを囲み、津波をシャットアウトするのでしょうか？

◎あなたのトイレは大丈夫？帰宅困難者1万5千人のトイレをどうする？

古くからの通信読者で、デベロッパーで設計を担当する方から電話。40 数階の超高層ビルを建替える計画を進めているが、地震の時の帰宅困難者 3 千人を受け入れるように行政から言われている。大きな地震の時は水道が止まってしまうので、飲用水はペットボトルの備蓄で対応するとして、ビルで働く 1 万人 2 千人と合わせ、1 万 5 千人のトイレをどうするか？下水のマンホールの上に簡易な便器を置いて下水を直接トイレにしてしまう、マンホールトイレという手もあるが、設置が難しく、使い勝手も悪い。電気は自家発電機があるので、が普及を手伝う電源開発の井水利用専用水道を設置して水源を二重化、震災時に市水が止まっても、井水を利用、水洗トイレを使えるように出来ないかと。

平成 13 年の都条例で、都内での深い井戸の新規掘削は禁止されている。H13 年以前に設置された古井戸がないと難しいと答えると、建設地は今現在も地下水位が高く湧水の排出に困っているので、湧水を利用出来ないかという。条例で湧水の飲用利用は禁止されているが、トイレ等の中水利用は問題がない。料金の高い市水の中水に利用しているのであれば、中水は飲用に比べて要件が緩く、処理コストが安い。井水を膜濾過などの高度処理して飲用に利用するよりも、湧水を処理して中水に利用出来れば、水道料金の削減効果は大きい。湧水の浄化設備は電源開発の費用で設置、従量制でデベロッパーに電源開発が中水を安く供給する方向で検討することに。

地下水位が上昇して、湧水に悩むビルは多く、東京駅や上野駅のように、建物が地下水で持ち上げられ、アンカーを打ったり、鉄の重しを地下に置いたり、苦勞している施設は多い。工業用水を大量に汲み上げて地盤沈下をもたらした工場も、今では地方や海外に移転し、残った工場も汚水を処理して再利用するなど、工業用水の汲み上げが減った結果である。逆に地下水位の上昇が震災時の土地の液状化の危険性を増している。新規の井戸掘を原則禁止する都条例を転換、地盤沈下の恐れがある場合を除き原則許可し、非常時の事業継続性を高めるべきではないか？

◎余命半年

昨年 10 月半ば、お茶の水の三楽病院で四半期に一回の診察。血液検査の結果は夜毎の酒にも関わらず、腫瘍マーカーは勿論、血糖値、肝機能値等も全て問題なし。主治医の阿川院長も舌を巻く頑健。冬はスキー、夏は素潜り、春秋は山菜や海藻採り、キノコ狩り、魚釣り、野球やチャンバラと朝から晩まで、飽きることなく遊ばせてくれた故郷の海、山、野原と、勉強しなさい！などと野暮なことは一言も言わなかった両親に感謝！

大腸がんの治療は術後 10 年の来年 3 月、内視鏡で胃を検査(大腸は進行が遅いので 3 年に一回でいいとのこと)して何もなければ、ステージⅢb「治癒する見込みなし」の大腸がんとの 10 年間の「闘病」が終わる。あとは一年に一回三楽病院で健康診断してチェックすることに。には「がんと闘う」という意識はさらさらなく、お腹を 30 センチ切って、盲腸と一緒に患部の上行結腸を 30 センチ切除、周囲のリンパ腺も 9 か所切除、阿川先生の指示に従い五ヶ月間、月に一回一週間入院して抗がん剤の 5FU の点滴、その後 3 年間朝晩 5FU を服薬。それ以外は術前、術後で全く変わらない生活。入院中もパソコンを病室に持ち込み仕事。癌に効くというサプリメントを勧めてくれる友人もいたが、飲む気にならず。昔は癌に効くと喧伝されたアガリクス等の名前を最近は聞くこともなくなった。

今はヒアルロン酸やコンドロイチンなどが大々的に宣伝されているが、古来からの「百薬の長」に優るものはない！？

当時外科部長だった阿川院長に、ステージⅢb「治癒する見込みなし」の大腸がんの患者を抱えてどういう気持ちだったんですか？と聞く。阿川先生、親指と人差し指で丸を作ってがんの大きさを示し、●の三鷹寮の先輩の、先々代の河野院長にやれと言われたからやっただけという。根治できるとは思っていなかったようだ。スタンダードな術式に従い、転移確率の高いリンパ腺9箇所を切除してみると3箇所に転移している。余命半年、精々一年と思っていたと。病巣をとってもがん細胞はリンパ液に乗って全身を駆け巡っている。他の臓器に定着しないように大腸がんのベース抗がん剤の5FUでがん細胞を叩く。それやこれやが奏効して間もなく完治宣告。この冬も百薬の長を友に、仲間とスキーを楽しめるのは嬉しい。ゴッドハンドの阿川先生始め、関係各位に深く感謝！

◎柔肌と扁桃腺・半世紀後の虐めの告白

風邪でもないのにずっと喉がいがらっぽい。鮮紅色の血痰も出る。トイレにも血痕があったわよと、神様。咳をした拍子に飛び出したのだ。大丈夫だと思うが、喉頭癌や肺癌だったら大変。大腸に癌を持つ身としては多少気になり、三楽病院の耳鼻咽喉科へ。

初めて鼻から喉まで内視鏡を入れる。炎症を起こしている訳でもないのに、扁桃腺が大きい以外に異常はない。小学生の時、扁桃腺がよく腫れ発熱するので、村の診療所で手術したが、口から血を吹き出し悶絶、取りきれなかった。その扁桃腺が、半分取って小さくなった筈なのに、モニターの中で大きい顔をしている。煙草は吸わないし、毎年胸部のCTを撮っても肺は異常なしだ。大丈夫だろうが、一月後、念のため再診することに。

11月、市ヶ谷の私学会館で、昼から八峰町の関東故郷会。キリタンポや鱒の鮓など田舎の味も楽しみ、中学の同期生で二次会も盛り上げる。柔肌の●がスカンポ（イタドリ）を肉厚にしたような、トイレに投げ込んでおくと虫が湧かないほど殺虫効果のある「サク」にかぶれるので、よく虐めたと、虐めた側の隆ちゃんが「告白」。聞けば十人ほどの同期生で、サクを食べてかぶれたのは●だけ。親には精々食べ過ぎるなど言われただけという。

皮を剥いて香ばしいサクを口にすると、先ず唇の辺りが痒くなり、搔くと赤く腫れ化膿、顔中が腫れてお化けのような顔になる。春先には山に入ってはいけないと、毎年親にはきつく言われるのだが、皆が山遊びに行き1人だけ残されるのは淋しい。一緒に山に入ると、これを食べ！とサクを押し付けられる。漆の木だと意識しただけで肌が痒くなるのも●だけ。怖いもの知らずの●だが、サクと漆が天敵で、柔肌と扁桃腺が最大の弱点だ。

◎日本から木材を輸出！

北国を木枯しが吹き荒れた日、8時28分発のはやてで仙台へ。こまちと連結のはやてのホームで、白神山水を求めるがホームの売店にも、車内販売にもない。次回ははやてではなく、こまちに乗ろう！JR東日本のごく限られた場での販売で年間百万本以上売り上げるとするのは、まだ応援のし甲斐があるということ。大宮の次は仙台停車の筈のはやてが爆弾低気圧の暴風のせいで福島駅の手前で停車。少し遅れて雪のぱらつく仙台で降りる。

白神山地の天然水の次は秋田杉を売れないか？藤里の佐々木町長と、営業顧問をする阪和興業の東京本社で担当専務も交え事情を伺う。1ドル120円時代から台、中、韓に輸出、

1 ドル 80 円の円高にもかかわらず現在、年間 10 万立米まで国産材の輸出を伸ばし、その半分 5 万立米の輸出を阪和興業が手掛けるという。かつてオランダ人が「美麗島（フォルモサ）」と感嘆の声を上げたという、緑豊かな台湾だが、台風被害が大きいので木材の伐採が制限され、台湾への輸出が一番多い。しかも戦前日本の植民地時代に杉を沢山植えた杉が好まれるが、用途としてはコンクリートの型枠用が多いという。

杉も太めの丸太は国内で合板にも使われるので、細い間伐材の輸出が主だと言う。林道がきめ細かく張り巡らされるようになり、伐採した丸太の枝払いも山で機械でできるので、間伐材も集荷して利用できるようになった。ただ間伐材だけだと藤里町だけでは一船単位で二千立米集めるのは難しいと、佐々木町長。北秋や秋田県全域で取り組めばどうにかなるし、同窓の元建設官僚で旧知の、大館の小畑市長にも声をかけてみようかと町長。意外と知られていないが。狭い国土の割に日本は森林資源が豊富（の気憶では世界 7 位）。宮崎県、大分県に続いて、秋田が木材輸出県に名乗りを上げられれば素敵だ。

◎おむすびを握る！？

師走の頭の土曜日、日比谷の鹿児島物産館二階の「123」で 93・94・95・96 年入寮の若い諸君の忘年会に参加。弁理士の後藤君、消費者庁総括課長補佐の平井君、政策投資銀行人事課調査役の石川君、名大医学部を卒業、法学部に入り直して、今は大阪の病院で小児科医をする加藤君、小学館の有井君等、十数年振りに顔を合わせるメンバーの他に DeNA の山本君、夏に本郷でちゃんこ鍋を囲んだ国立劇場の西沢君、東電の宮崎君、三井物産の高取君、神戸の弁護士の久米君の十人と、鹿児島名物黒豚しゃぶしゃぶと焼酎で旧交を温める。

飲み会の前に 94 年入寮の神戸の久米弁護士が、顧問先の米屋の菊太屋の東井社長と本郷の事務所に顔を出し、年明けから菊太屋の営業を手伝うことに。菊太屋は無農薬や有機栽培米など、こだわりの特選米を、デパートや駅ビルで販売、こだわりのご飯で作った炊きたておむすびを、京都駅ビルの伊勢丹と新大阪駅の売店、大阪駅ビルの大丸梅田店で売る。出張の折、新大阪駅の「米屋のおにぎり屋」菊太屋で 220 円の鮭と 200 円のタラコのおにぎりを買い待合室でお昼。少々高いが美味しい。京都では 250 円のおむすびも飛ぶように売れ、結構な売上だという。

戦前からの老舗の米屋の若社長が、古い業界から革新的ニュービジネスに挑むのを手助けするのは面白い。三鷹寮の若い後輩から営業顧問先を紹介して頂くのも初めてで、嬉しい。米屋とおむすび屋の出店、米農家との提携、情報収集等、新しい分野の仕事に、「高齢者」の身でなお挑戦できるのも楽しい。若い寮生諸君と付き合い始めて 20 年近く、役所や民間会社でも働き盛りの課長、課長補佐クラス。仕事でもコラボ出来るのは嬉しい。

◎のポルトガル紀行（LOOK JTB「ポルトガル8日間」2012. 4. 30～）

⑤ポートワイン誕生

朝 9 時ポルトから 50 キロ、ポルトガル(初代国王アフォンソ・エンリケス)誕生の地、ギマランイシュへ。道中現地ガイドの女性が葉っぱを出して、前夜の千切り野菜スープの正体が、丸まらないチリメンキャベツだったことを教えてくれる。道路の両側にはポートワインの原料になるワイン畑が広がる。ギマランイシュでは 1110 年にアフォンソ一世が

産まれたギマランイシュ城や 15 世紀初めに建てられ、修復されて政府公館として国賓などの接待にも使われ 39 本の煙突を持つブラガンサ公爵館、オリーブの樹の聖母教会等、歴史と伝説の見所の他にも 14~15 世紀の建物が並び、二階の窓で老女が物憂げに外を見やり、ジーンズとTシャツの洗濯物が翻る。オープンカフェで男女がおしゃべりを楽しむ。

同じ道をポルトに帰る。波飛沫散る海岸からドウロ川を逆上り、歴史地区へ。人口 28 万人、リスボンに次ぐ第二の都市。国名の元となった古都の、世界遺産に登録された歴史地区は見所が多く、大聖堂やサンフランシスコ教会等、枚挙に暇がない。ドウロ川北岸丘陵地に築かれた街には起伏が多く、ロープウェーやケーブルカー、エレベーターが歩行者を助け、兩岸を結ぶ 5 本の橋が美しいシルエットを見せる。昼食は歴史地区の川を見下ろす素敵なレストランで海老入りポタージュスープと蛸のリゾット。予想を裏切って蛸は柔らかいが、しょっぱく、ビールが進む。小さなジョッキが一杯 1,7U@。

食後、サンデマンのポートワイン工場を試飲。「ドン」の愛称で知られる商標そのままに、黒マントに黒いソンプレロ、黒づくめの若い女性が案内、日本語のビデオも見せてくれる。上流から絞り立ての原液を樽に入れて運んだ、マストと 2 本の大きな帆の、優美な姿のラペーロ(帆船)が浮かぶ河岸には 30 以上のワイン工場が並ぶ。サンデマンは 1790 年にスコットランド人ジョージ・サンデマンが創業した。17 世紀にスペインに対抗するためイギリスに関税特権を与えたので、イギリス企業が多数進出、ポルトのワイン醸造が盛んになり、イギリスはフランスから高いワインを輸入する必要性が薄れた。免税特区を作りイギリス資本を誘致、ワイン産業を興し、雇用を創出、外貨獲得。イギリス・オランダ、フランス・スペインの合従連衡、政治・経済関係、列強の興隆と没落は今に通じる。

ドウロ川上流の山の斜面の段々畑で栽培され、人手で摘み取られた葡萄は機械で搾られ、樽に詰められて冬を越し、歴史地区の対岸ガイアの工場に車で運ばれ、熟成と瓶詰めが行われる。ポートワインは糖分が残る発酵途中でブランデーを加え、酵母の働きを抑える酒精強化ワイン。糖分が多く、食前、食後酒として飲まれる。夕食はホテルの近くで添乗員の高井良さん、同行の細谷さんとホテルで教えられた、ホテルの 2500 円のコース料理の次に美味しいという、近くの住宅街のレストランで食事。3 人でアサリのワイン蒸し、チーズの盛合せ、ソーセージのグリル等 5 皿ほどとパンでお腹一杯。生ビール一杯と店お任せのグリーン(白)ワインボトル 1 本で一人 3300 円。ホテルのコース料理といい、レストランのアラカルトといい、美味しいワインと併せ、手頃な値段で楽しめるのは嬉しい。8 時近くには客もまばらだったが、9 時半頃帰る時はおめかしした客で一杯。

⑥黒マントの男

ツアー5 日目の朝はパステルカラーのアズレージョ(絵タイル)で飾られた家並みや教会、運河に浮かぶ小舟、モリセイロの美しい町アヴェイロへ。高速道路を降りると内陸に大きく食い込む潟を利用した塩田があり、日本人には珍しい。教会や市庁舎、鉄道の旧駅舎など公共建築物の外壁を彩る美しいタイル絵は往時の生活を偲ばせる。自然の良港として栄えてきたアヴェイロの主な産業は現在も漁業と牧畜。潟で採れる海藻が、埋め立てた草地を肥やし、酪農が盛んになったという。肥料用の海藻を集める船がモリセイロで、大きく反り返った舳先を持ち、極彩色の絵で飾られて美しい。街の中心には沢山のブランドの入ったショッピングモールも。ここでも新旧対称の妙。

次いで政治のリスボン、商業のポルトに次ぐ人口 10 万人ほどの文化の中心コインブラへ。イタリアのボローニャ、イギリスのオックスフォード、フランスのソルボンヌ、スペインのサラゴサに次ぐ歴史を誇るコインブラ大学。多くの政治家や文化人を輩出、ポルトガルの歴史に大きな役割を果たした。1290 年にディニス王によってリスボンに作られ、1537 年にコインブラに落ち着くまで両都市を行ったり来たり。1911 年にリスボン大学が出来るまでは、国内の学術の中心。クラシックできらびやかな図書館では年代物の本が、監視付きの部屋で今も利用出来る。本に虫は付き物だが、飼っている蝙蝠に食べさせ、夜毎シートを敷いて糞を片付ける。ソンプレロのスペインでシェリー酒、マントのコインブラ大学のポルトガルでポートワインを商うサンデマンと同じ、黒マントの学生が行き交う、大学町の雰囲気は独特。男子学生のみで歌われるコインブラファドも有名と聞くと、何やら寮歌を高歌放吟した学生時代を思い出す。余韻にひたる間もなくリスボンへ。食事はフリー。不案内故、初日の昼食べたレストランへ。「自由」を与えられた途端に困るのは困りもの！

⑦地果て、海始まる

リスボンへの帰途、コインブラから百キロ走って、アルコア川とバサ川の交わる町アルコバサへ。世界遺産のサンタマリア修道院で有名な小さな町だ。12 世紀初め、初代ポルトガル国王アフォンソ・エンリケスが、レコンキスタ(国土回復戦争)に協力したシトー修道会に感謝して、修道院寄進を宣言したことに始まる。着工後 70 年、1222 年に完成後も歴代の王によって増改築が行われ、最盛期には千人の修道士達が暮らしたが、近代化革命の流れに押し流され荒れ果て、今は博物館に姿を変える。観光客を呼び、末裔に飯の種を与える。自給自足を旨とする彼らの質素な生活の痕も垣間見るが、経済危機に揺れる現代のポルトガルは、次代の生活の糧に、何を遺せるのか？悲恋物語の主人公ペドロ一世とイネスの棺があることでも知られる修道院を後に、更に百キロ走ってリスボンへ。

旅程の 6 日目、観光最終日の朝は、先ずロカ岬へ 30 分ほど走る。西経 9 度 30 分、ユーラシア大陸の西の果て、高さ 140m の断崖絶壁の上に、ポルトガルを代表する詩人カモンイスの詩の一節、「ここに地果て、海始まる」の石碑がぼつんと立つ。その向こうに、赤い色の灯台。故郷秋田の、津軽との県境近く、白い灯台がぼつんと立つ、チゴキ岬の絶景を思う。白神山地が海に雪崩れこみ、紺碧の日本海を二つに裂いた所に、純白の灯台が、空の青を割って立ち、白い鷗が舞う。

松葉牡丹の桃や黄、白やらが風に揺れる。エンリケ航海王子やコロンブス、マゼランらが、弛く湾曲する海と空の間を見つめ、ガリレオ・ガリレイの地動説を確信、新大陸の存在と世界一周航海の成功、香辛料と金銀財宝の獲得による一攫千金を夢見たに違いない岬で、対岸に、遠いロシアが見えないかと目を凝らした、「郵便局の革ちゃん」が立つ。

⑧ラテン化の勧め

ロカ岬から緑豊かな田舎の山道を登り、リスボンの西 28 キロ、天正遣欧使節も訪れたシントラへ。深い緑に覆われた山中に、王公貴族の夏の離宮や別荘が点在、イギリスの詩人バイロンに「この世のエデン」と称えられた。大航海時代から時折歴史の舞台にも登場する美しい世界遺産。イスラム教徒が残した建物を増改築、厨房から伸びる大煙突二本とアズレージョ、天井画が印象的な離宮。町を一望する山の上には 7~8 世紀にムーア人が築き、

1147年にアフォンソ・エンリケス王が陥落させたムーアの城跡。大西洋まで望めるといふ。

リスボンに帰り、エンリケ航海王子とヴァスコ・ダ・ガマを称え、16世紀初頭に着工、1世紀後に完成した、ジェロニモス修道院を見学。海外からもたらされた富を注ぎ込んだポルトガル海洋王国の記念碑とも言える。だが海外から持ち帰った富を豪壮な宮殿や教会、修道院の建築に注ぎ込むのではなく、産業に投資、産業革命の流れの先頭に立っていたら、ギリシャの次の経済破綻はポルトガルかと、心配されることはなかったかも知れない。イスラムに支配された地中海諸国の中で、最初にレコンキスタに勝利、国土を回復したヨーロッパの西の果ての小国ポルトガルは、大航海時代の先陣を切り、大きな植民地と膨大な富を手に入れた。だがその富は再生産のプロセスに投入されることなく「世界遺産作り」に浪費され、日用品のポートワインの生産までイギリス資本に任された。列強が次々と植民地を手放す時代になっても最後まで植民地にしがみつき、独立戦争鎮圧の戦費の増大が、更に経済の足を引っ張った。

案内してくれる現地日本人ガイドの河内さんによれば、ポルトガルの失業率は25%（日本の新聞では15%）、若者の失業率はその倍あり、消費税は23%。日本の失業率5%は完全雇用状態、日本人は悲観的過ぎるといふ。それにしてもギリシャの様に過激なデモがある訳でもない。ロマ（ジプシー）のスリに気を付けてといふと言われるが、教会の入口で物乞を時々見かけるだけで、ホームレスも見ない。フランスでも失業率10%超で、サルコジからオランダへ、政権交代の原因になったが、それに比べても日本はまだまし。どうして日本人はそう悲観的なんですかといふ河内さん、実は日系ブラジル人。日本の会社のブラジル支社から、ポルトガル支社を作るために派遣され、日本の会社がポルトガル撤退後も残ってガイドをしている。外見も日本語も日本人そのものでも、ブラジルで生まれ、育ち、ポルトガルで働けば楽観的なラテン人になるんだ！

⑨ポルトガルなのに中国！？

魚とのチョイスで食べたイベリコ豚の料理は忘れてしまったが、一杯2,5U@の生ビールの小を二杯と、デカンタに並々入って飲み切れないという赤ワインを一杯、同行の細谷さんから分けて頂く。観光最終日の午後、エヴォラへ向かう。テージョ川の南に位置、「テージョ川の彼方」を意味し、コルク樅やオリーブ、麦畑がどこまでも続く、アンテレージョ地方の中心都市。ポツンポツンとコルク樅やオリーブの樹が植えられたなだらかな草地には牛や羊が草を食み、所々じゃがいもや麦、葡萄が植えられ、傾斜のきつい丘はコルク樅やオリーブの林を作る。高速道路のサービスエリアの公園で、ごわごわとひび割れた、厚いコルク樅の肌を初体験。こんな肌の恋人を持つには勇気が要るが、ポルトガルでは人気。何にでも化ける。売店でコルクの帽子39,5U@、バッグ80U@、財布、ベルト等も売られている。珍しくポケットの沢山ついたコルクのショルダーバッグを82U@で買う。肌身離さぬ恋人になるか？水を通さないか聞くが、ワインの栓に使うくらいだから大丈夫という。

16世紀建造の水道橋のアーチが美しいエヴォラの城壁内には、8千から1万人が居住、旧市街を形成する。城壁の上にも家が建てられ、水道橋の石を再利用して作られた家も。2~3世紀にローマ人が建て、月の女神ディアナに捧げられた神殿の横には15世紀建造のロイオス教会。隣接の修道院はボサーダ（歴史的建造物を改修、再利用する国営ホテル）として使われ、アンチークでゆったりした雰囲気、食事やお茶を優雅に楽しむ老若男女。

12～13 世紀建造の大聖堂では、天正遣欧使節も弾いたという、ラッパの突き出たラテン式パイプオルガンの演奏も思いがけず聴き、帰国後彼らを待ち受けていた運命を想う。ローマ、イスラム、キリスト教の各時代にタイムスリップしたような、街全体が美術館のような世界遺産の街で、時代を橋渡しするかのような階段の鉄の手摺に跨がり、スカート姿の乙女子らが歓声を挙げて滑り降りる。

土産物屋でピンクのキャップを見つけ、ゴルフ帽にと 5u@で買う。よくみると「メイドインチャイナ」とあり、レジの女の子もチャイニーズ。城館や修道院の中庭、街路樹にはオレンジが植えられ、橙の実と白い花を同時につけているが、イスラムに由来、食べられない。マンダリンオレンジが 18 世紀に中国より伝えられたのが、食用の始まりという。いつでも、どこにでもいるチャイニーズ。今では中国のソブリンファンド(政府系の投資会社)が、インフラ中心にポルトガルに盛んに投資している。ラテン系で小柄、肌の色も近く、お互いに親近感を抱くポルトガル。日本からの旅行客の割には投資は多くないようだ。

⑩身の丈を知る！？

エヴォラから、元来た道を走り、テーベ川に架かるもう 1 つの橋を渡り、リスボンへ。8 時にファドの聴けるレストランへ。日本の演歌に似て、人生の喜びや悲しみ、郷愁の想いなどを奏でるポルトガル人の心の歌、ファド。社会の底辺の貧しい人たちが楽しむ大衆音楽が始まり。19 世紀に形式が確立、次第に庶民の間に広まり、現代まで受け継がれる。日本の演歌は社会が豊かになるにつれ若者の支持を失い、衰退傾向にあるが、ファドの運命や如何に！

ヴィオラと 12 の弦を持ち、物悲しくも時に明るいファド独特の旋律を生み出すポルトガルギター、ギターラの奏者と、男性二人を従え、黒いドレスから出した腕を肩からの黒いショウルで透かした貫禄充分の歌姫が、時に切々と時に激しく「運命」を歌う。黒マントのコインブラ大学の先生も歌い、拍手喝采。学生帽と学生服、黒マントに高下駄の旧制高校の制服で寮歌を歌い、日本でお金を貰えるだろうか？

翌朝、4 時半起きで空港へ。ルフトハンザで先ずフランクフルト。山の尾根に無数の風車の群れ。四方に広がる尾根に白い風車がヒトデの触手のように伸び、機体が傾くと揺れる。再生エネルギーバブルの弾けたスペイン上空だ。化石燃料がいずれ枯渇するとすれば、如何にして太陽エネルギーを利用するかが、人類の課題であることに変わりはない。尾根が険しさをますと、緑のヒトデの白い触手は消え、雪を頂くピレネーの、白銀の険しい山々が現れるとフランス。平坦な平原が続くと、間もなくフランクフルト。空港のトイレに入り、「身の丈」を知る。「朝顔の高さ驚く小人族」！それでも世界へ！それでも世界と！(完)

◎原発、エネルギー問題、CO2 を考える

・ ・ 東大三鷹クラブ第 106 回定例懇談会のご案内

平成 25 年 1 月 24 日 (木) の第 106 回定例懇談会は、吉川廣和さん (DOWA ホールディングス相談役、昭和 37 年入寮) に、「原発、エネルギー問題そして CO₂ を考える」と題して講演をお願いしました。吉川さんは 2 度目の登壇です。平成 15 年 5 月、同和鉱業の社長時代、第 48 回定例会で同社の産業廃棄物処理、資源リサイクルなど、近代的な環境ビジネスについて、情熱をもって語っていただきました。

社長、ひきつづき会長に在任中、吉川さんは、同社を新しい時代に即応した、総合環境事業のトップ企業に育て上げました。そして、本社を、秋葉原の再開発ビルの最上階（22F）に移し、持株会社としての DOWA ホールディングスの下にグループ企業を再編成しました。明治以来金属鉱業を中心に 130 年の歴史を有する同社を、名実ともに新しい企業体として再出発させることに成功しました。吉川さんは、その時点で後進にバトンを渡し、相談役に退かれました。

しかし、それからが吉川さんの国家、社会のための新しい任務の始まりでした。折しも政権は民主党に移行し、利害関係の錯綜する政策課題を、民間の有識者による委員会等の検討に委ねる場面が増えました。その多くの会合に、吉川さんが中心的なメンバーとして加わり、解決への道筋を示すことに貢献されて来ました。

しかしながら、政局は混迷の度を加え、東日本大震災、福島原子力発電所の事故からの復旧、復興は、さまざまな困難に逢着し、現在に至るも問題が山積しています。さきに行われた総選挙では、乱立する各党の政策論争の最大のテーマの 1 つは、原発とエネルギー問題でした。原発即廃止、目標時期を明示しての廃止、脱原発、卒原発などのキャッチフレーズが飛び交いました。しかし、いずれの党も原発の取扱のみならず、関連する総合的なエネルギー政策について、説得力のある具体的な施策の方向は全く明らかにせず、空虚な論争に終始しました。

吉川さんが、今回のテーマに、原発、エネルギー、CO₂をとり上げたのは、まさにこうした問題について、冷静に筋道を見出して行こうというお気持ちからです。吉川さんは環境省の中央環境審議会、経団連の環境委員会の委員に在任しておられるほか、原子力損害賠償支援機構運営委員として、原発事故後の東電の経営を監視する立場にもあります。新しい政権の下でも、ひきつづき、吉川さんがいろいろな場面で重要な役割を果されることが期待されます。今回、吉川さんの問題提起に対して、お集まりの皆様が積極的に議論を深めて下さることを願っております。（平賀 記）

日時：平成 25 年 1 月 24 日（木） 18 時 30 分～21 時

場所：学士会館本館 203 号室（千代田区神田錦町 3-28 TEL 03-3292-5931）

会費：5000 円（会場費、夕食代・飲み物代、通信費など込み、別途二次会）

申込先：平賀・干場 FAX 03-5689-8192 TEL 03-5689-8182

（有）ティエフネットワーク Email：tfn-hoshiaba@blue.ocn.ne.jp

◎目指せ紅白！

08 年シドニー大学からの交換留学生で、ユニバーサルミュージックから歌手デビューした三鷹寮の歌姫サラ・オレインが、昨年 10 月 17 日の読売新聞のコラムに登場、TBS ラジオ「ゆうゆうワイド」にも出演、NHK BS テレビ「エル・ムンド」に 11 月 5 日（月）から、23:00～23:48 分の時間帯で 4 夜連続生出演、さらに 11 月 9 日恵比寿ガーデンホールでデビューコンサート（詳しくは <http://www.sarahalainn.net/news/index.html>）。

NHK に出演するなら、一年前にサラの紹介のため一緒に挨拶に伺った際、「アメリカから凱旋して NHK に出演出来るようになるといいね！」と見送ってくれた寮同期、生え抜きトップの小野 NHK 副会長に報告とお礼に行かなければ！思いのほか早く、NHKBS の「エル・ムンド」に 4 夜連続生出演しますと、ステージパパ宜しく、サラを同行して挨拶。

年明けに好評の初アルバム「セレステ」に続いて新アルバムを出す。この勢いで来年は紅白出場だと盛り上がる。副会長の小野君といえども、発表 30 分前に封筒を渡されて、紅白の出場者を知るといふ。かつてと違って音楽の好みも多様化、40%目処の視聴率を上げるのに苦労しているよう。逆を言えば特定の分野、一定の層に支持されれば出場可能ということ。サラの癒し系の美声を紅白で聴くのも夢ではない！

NHK 副会長の小野君と広い応接で面会、サラの紹介も兼ね同行した 11 年入寮の兼子君も、VIP との対面に目を白黒させるが、場数を踏めば成長する。彼らにはいずれ日本の屋台骨を支えて貰わなければならない。授業を終えた寮委員長の和田君も加わり、4 人で公園通りの「ネギシ」で牛タン焼きと麦トロで乾杯。麦トロ初体験の寮生に、その由来を説き、08 年入寮のサラと 11 年入寮の男子 2 人を、とろろ芋のようにつなげる。

◎生・サラ・見

恵比寿ガーデンホールでのサラ・オレインのデビューコンサート。5、6 百人ほどでほぼ満席。寮で一年下の中村君と二人で行ったが、他に先輩が二人。留学生も含め寮と駒場で一緒だった若者の顔も多数。癒し系のきれいに澄んだ歌声を楽しむ。

加藤登紀子さんの事務所の徳田社長から、「干場さま、ご連絡ありがとうございます。加藤登紀子、幸子に伝えます。サラさんのご活躍もメールで頂いております。すごいですね！いつか登紀子とジョイントもいいですね！」と、同窓の大先輩から連帯のメッセージ。

お登紀さんの旦那の藤本氏が亡くなった後、姉さんの幸子さんが「干場さん、いい恋をしないと、いい歌出来ないのよね！」と言っていたが、大先輩とジョイント出来れば、サラの歌にも磨きがかかるだろう。我が歌娘サラとお登紀さんとのジョイントコンサートが実現出来ると素敵だ。

◎十回目の同期会

11 月の最終金曜日、歌舞伎町の居酒屋無門で S41・42・43 年入寮合同同期会。28 人と予想を越え床の間にも席。🍷の次の寮委員長、事務次官に次ぐ、環境省 No.2 の地球環境審議官だった小島青学大教授が原発と政界裏話。今夏フィンランド大使の任を終えた国交省 No.2 の元国土交通審議官の丸山君が、大学まで教育費無料のフィンランドでは若者が学生を長く続け、社会に出るのが遅いのが悩みの種。担税率が高いが、年金や医療、介護等の福祉が行き届いたフィンランドは、意外と階級社会で、庶民は月の可処分所得が十数万円くらいでも、満足して生活していると近況報告。🍷は進行に手一杯で誰とも話せず！

◎終わりに・・・🍷通信のデジタル化

お陰様で本通信も今号で 93 号を数え、リアルで 3 千人、メールで千人に送らせて頂いております。兄が明治の郵便制度の創業から続く秋田の片田舎の特定郵便局、岩館郵便局の四代目の局長をしていた間は、兄の営業協力の意味もありました。兄が「郵政改革」を機に郵便局長を辞めたこともあり、「郵便局の革ちゃん」としては忸怩たるものがありますが、時代の波に逆らえず、次号から原則デジタル化、メールで送らせて頂きます。メールではあまり長いと読んで貰えないので、ページを半減、隔月から月刊に変えたいと思います。若干、混乱があるかと思いますが、宜しくお願い致します。再見！